野山の花

― 身近な山野草の食効・薬効 ―

城西大学薬学部　白瀧　義明（*SHIRATAKI Yoshiaki*）

ウツボグサ *Prunella vulgaris* L. var. linalacia Nakai (=*P. vulgaris* L. subsp. *asiatica* (Nakai) H.Hara)（シソ科 Labiatae APG : Lamiaceae）

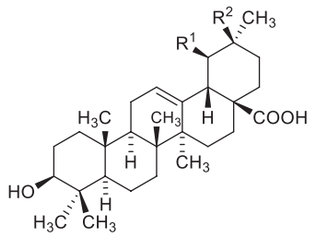
連絡先：城西大学薬学部生薬学教室
shiratak@josai.ac.jp

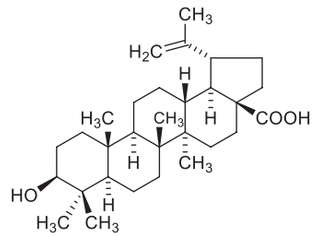
しとしと雨の降る６月，梅雨の晴れ間に野山を歩いていると道端などで紫色の小さな花を穂状に付けた草本を見かけます。これがウツボグサです。本植物は高さ約 20 ～ 30cm の多年生草本で，東アジア温帯地域に分布し，日本各地の低山，野原や丘陵の道端など，日当たりのよい山野の草地に群生します。匍匐（ほふく）性で，高さ 10 ～ 30 cm，茎は４月頃に地表を這うように伸ばし，直立またはやや斜めに立ち，茎の断面は四角形，葉は披針形で対生し，全体に細かい毛が密生していますが，シソ科植物特有の芳香はありません。花期は５～７月，茎の先端に３～８ cm の角ばった花穂（かすい）をつけ，紫色の唇形花を穂の下から上へ順に咲かせます。花が終わる夏には花穂は暗褐色に変化し，枯れたように見えるところから夏枯草（かごそう）とよばれます。茎は根元から出て地面を這い，匍匐枝（ほふくし）（ストロン）となり，その先に新しい苗ができます。和名は，円筒形の花穂の形が，その昔，武士が弓矢を入れて背中に背負った道具の靫（うつぼ）（靫，筟）に似ていることに由来し，地方によっては，アブラグサ，クスリグサともよばれます。花穂を６～８月，花が終わり枯れかかる頃に採集し天日干しにしたものをカゴソウ（夏枯草 Prunellae Spica）といい，膀胱炎などに用いる夏枯草湯（かごそうとう），夜に悪くなる眼球の痛みに用いる夏枯草散（かごそうさん），涙のう炎に用いる止涙補肝散（しるいほかんさん）などに配合されますが，漢方での使用はあまり多くなく，もっぱら民間で腎炎，膀胱炎，脚気などでむくみがあるときに，消炎利尿薬として用います。花穂や全草（葉や茎）の成分としてはトリテルペノイドの ursolic acid, oleanolic acid, betulinic acid, 2α, 3α, 24-trihydroxyolean-12-en-28-oic acid，フェノール化合物の rosmarinic acid，フラボノイドの rutin，hyperin（hyperoside），抗 HIV 活性があるとされる多糖類の prunellin，タンニンや多量の塩化カリウムなどの無機塩類などが報告されています。塩化カリウムなどの無機塩類には利尿作用があり，カリウムには体内の塩分（ナトリウム）を排出する作用があります。また，タンニンには消炎作用と組織細胞を引き締める収斂（しゅうれん）作用があり，煎液でうがいすることによって，口内炎，口内のはれもの，のどの痛み，扁桃炎などの腫れや痛みの緩和に役立ちます。中国では水分補給と利尿により疲労回復を促すものとして暑気払いに用い，また，ヨーロッパにおいても同属のタイリンウツボグサ *P. grandiflora* Jacq. はセルフヒール（self - heal）といい，肺病や胃腸の病に利用

写真１　ウツボグサ（花）A

写真２　ウツボグサ（花）B

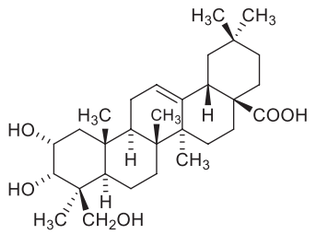
写真３　ウツボグサ（新芽）



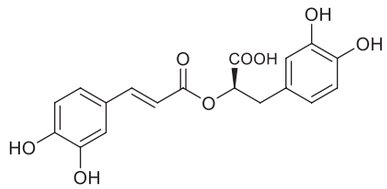


	R^1	R^2
ursolic acid	CH_3	H
oleanolic acid	H	CH_3

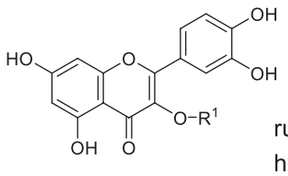
betulinic acid



2α , 3α , 24-trihydroxyolean-12-en-28-oic acid



rosmarinic acid



rutin　　R^1 = glucose^{6}–^{1}rhamnose
hyperin (hyperoside)　　R^1 = galactose

図１　成分の構造式

写真４　ウツボグサ（果実）A

写真５　ウツボグサ（果実）B

写真６　生薬：カゴソウ（夏枯草）

され，現在もハーブティとして用いられています。近縁の日本固有種に高山性のタテヤマウツボグサ *P. prunelliformis*（Maxim.）Makino があり，本植物はウツボグサのようにストロンを伸ばして新苗が誕生せず，根茎は切れずに年々，数珠のように連なって伸びていきます。